

解説 ヨールカと新年の祭り

作品の題名にも用いられているヨールカと作品の舞台となったヨールカを飾る新年を迎える祭りについて解説しましょう。

ヨールカとは、日本語で訳すとモミの木、日本でもクリスマスに飾られるお馴染みの木で、ヨールカに集うその祭りでは文中に記載があるように子供たちにプレゼントが配られるなど、開催の日付を除けば（クリスマスはキリストの生誕を祝って12月24～25日に、ヨールカの祭りは新年を迎える12月31日に行われる）趣旨はクリスマスとほぼ変わりません。

それもその筈で、もともとヨールカのお祭りはロシアには存在せず、18世紀になって当時の皇帝ピョートル1世が西欧から取り入れたお祭りなのです。

ちなみに今作には登場しませんが、クリスマスの代名詞であるサンタクロースと同様、ヨールカの祭りにもプレゼントを持ってやってくるお爺さんがいます。

そのお爺さんの名前はジエッド・マローズ（ジエッド）
とお爺さん、マローズは冬にロシアを覆う猛烈な寒波を意味しており、日本語に訳すならば吹雪お爺さんとなります。
いかにもロシアらしい名前です。

読書のポイント

ドストエフスキーのユーモアセンス

新年を迎えるヨールカの祭りに招待された「わたし」は、まず最初にある紳士を目にしますが、彼はコミカルに描かれており、特にあごひげに関する描写はともユニークで、翻訳を行っていた筆者も思わず大笑いしてしまいました。

あまり注目されていないドストエフスキーのユーモアセンスを味わえる作品です。

ヒューマンリズム作家としての鋭い視線

ドストエフスキーの作家としての洞察力を感じ取れるのが作品に登場する貧しい未亡人家庭教師の息子の描写です。

ドストエフスキーは子供たちのコミュニティを社会の始まりと同時に縮図としてとらえ、貧しさゆえにそのコミュニティで差別され不幸を経験する純真な少年を描くことで人間社会の不条理という問題を読者に投げかけています。

巧みな表現

今作ではドストエフスキーの巧妙な表現技術を堪能することもできます。

筆者が最も感銘を受けた表現は、文中でユリアン・マスターコヴィチが少女の持参金を計算した際に、持参金の余った分を衣装代に使つという、女性の衣装を表す

という単語で、これは直訳すると布きれやぼろ雑巾という意味の言葉で、女性の衣服を表現する際の蔑称です。

ユリアン・マスターコヴィチは、後に少女に語り掛けた際、少女の持っている人形が何で出来ているかと質問し、自ら「布きれ」で出来ていると答えますが、その単語も少女の衣装代と同じ　　という単語です。

読者は持参金の計算と少女への質問を聞いていた語り手の「わたし」と共に、この　　という象徴的な言葉によって、ユリアン・マスターコヴィチの厚顔で薄情な性格を知ることになります。

ドストエフスキーの遊び心

『ヨールカと結婚式』ではユリアン・マスターコヴィチという人物が社交界の重鎮としての役割を演じていますが、彼と同姓同名の人物が、実はそれ以前の作品である『弱い心』という作品に登場しています。その作品ではユリアン・マスターコヴィチは役所のお偉いさんで、ドストエフスキーはどうかやら二つの作品の同姓同名の人物を同一人物として描いたようです。

異なる作品に同一の登場人物を登場させる手法はウォルト・ディズニー氏や手塚治虫氏などによって行われ、スター・システムと呼ばれていますが、ドストエフスキーの試みはその先駆とも言えるでしょう。

あらすじ

1848年9月に発表された短編です。新年を迎える子供たちのダンスパーティーに呼ばれたユリアン・マスターコヴィチなる紳士が30万ルーブルもの持参金を持つ、とある裕福な商人の11歳の美しい娘を目にします。ユリアン・マスターコヴィチは指折り持参金の利子を計算してから少女に近づき、傍にいた貧しい未亡人家庭教師の息子である少年を蹴散らして少女に猛アタックして少女の両親にも熱心に取り入ります。

その5年後、語り手の「わたし」が教会を通り過ぎると結婚式が執り行われており、花婿はユリアン・マスターコヴィチで花嫁は他ならぬヨールカ祭りにいた少女でした。持参金はユリアン・マスターコヴィチの予測どおりの50万ルーブルで「わたし」は『それにして計算はドンピシャだったな』と考えます。

Copyright (C) 桃井富範 All Rights Reserved.

ドストエフスキー作品解説書『すらすら読めるドストエフスキー』好評発売中！